

ディケンズの『ドンビー父子』について

福島 光 義

外国語研究室

On Dickens' *Dombey and Son*

Mitsuyoshi FUKUSHIMA

English

Abstract

This paper deals with the image of child, especially the old-fashioned child in Dickens' first major novel *Dombey and Son*. This novel marks strongly the division in early Victorian England between the new, reconstructed world of middle-class adulthood and the world of childhood, which is figured as an endangered culture. Dickens gives the world of childhood its own distinctive voice and viewpoint as the new-fashioned materialistic world is filtered through the strange young-old child. So it presents Andrews' principles of metaphysical-historical source focusing primarily on the grown-up child. It examines the problem of child-parent relationship and analyzes the pride of characters, noticing Dickens himself and his life. It also examines the two main images and symbols, the railway and the sea, connecting with the temporal and the immortal, the mechanical and the vital and the masculine and the feminine.

I

F. R. Leavis は、Dickens の作品を真剣に再読することは、気が進まず抵抗を覚えるが、これは読者共通の体験であろう⁽¹⁾、と述べているが全く同感である。しかし、*Dombey and*

Son (1848)に限って言えば、プロット展開上の不自然さにいささか困惑したが、海の波の語りかけのもつミステリーに引っ張られながら再読できたと思われる。さて、20年以上も昔のことになるが、この小説に最初に出会った時、二つの場面から強い衝撃を受けたが、今もこの時の記憶が鮮烈に蘇る。その二つの場面とは、2度目の妻に逃げられ、その後事業にも失敗した Dombey が絶望の淵で自殺を図ろうとする直前に、父親から冷酷な仕打を受け続けてきた娘の Florence によって救われる59章の感動的な場面と、Dombey 商会の実質的な経営を任されている James Carker が、Dombey の妻と駆け落ちしフランスまで行った挙句、結局彼女に利用されたことを思い知らされ、その上怒り狂った Dombey に追われるはめになり、最後には列車に轢かれ、バラバラの肉の塊と化してしまう、55章の逃避行中の彼の心理と死の描写を含む、まさに衝撃的な場面とである。

前者は、息子の死後、落胆し一人苦悩する父の元へ最愛の肉親を失った悲しみを分かち合おうと慰めに行った Florence が、冷たく拒否され自分の部屋へ戻るよう指示される18章の場面と呼応して、より強い劇的な効果を挙げている。後者は、幻影や幻聴に悩まされながら列車のもたらす不安と恐怖に襲われ最後にはやはり轢死する、あの Dickens の小品ではあるが傑作の“Signalman” (1866) の信号手を想起させる。前者は「海」のイメージと、後者は「鉄道」のイメージとそれぞれ結び付く。Julian Moynahan⁽²⁾ や J. H. Miller⁽³⁾ は Florence や息子 Paul を中心とする海のもつ象徴的意味を、人間関係、特に親子関係に結び付けて論じている。海やその波の音は生や死や不滅の愛などの領域を語っている。Steven Marcus⁽⁴⁾ は、鉄道を時間と変化のテーマと結び付けながら詳細に論じ、Alexander Welsh⁽⁵⁾ は鉄道のもつ死の寓意性を指摘している。鉄道と海双方の関係性に焦点を当てて論じている批評家もいる。David D. Marcus は、鉄道と海のイメージは、「精神とその周りの世界との相互作用を示す」⁽⁶⁾ 方法を象徴化しているとし、Gerhard Joseph は鉄道と海の対立を、一時的なものと永遠なもの、変化と不変というようなものの対立を表わすとし⁽⁷⁾、又、Nina Auerbach は、鉄道と海の分離を父と娘の間の乖離を示すもの⁽⁸⁾、と解釈している。鉄道と海のイメージが喚起する寓意性や象徴性と密接な関係を保ちながら、やはりこの小説の最も中心的なテーマは、Miller が指摘する通り、「*Dombey and Son* を *Oliver Twist* と共に、*The Old Curiosity Shop* にまで遡って結び付けるテーマ、即ち親子関係」⁽⁹⁾ であるといえよう。Arthur A. Adrian も、逆転した親子関係を論ずると共に、家庭を国やヴィクトリア朝時代の寓意として見ている。⁽¹⁰⁾ 彼は又、家庭人としての、特に父親としての Dickens の姿を点検しているが、⁽¹¹⁾ これは Dombey を理解する上で有益である。Welsh は、作者 Dickens 自身の姿を Dombey に重ね合わせて論じている。彼は、Dombey や妻の Edith や Carker などのプライドや意志の分析は、作者自身の自己点検から生じてきたものであるとしている。更に彼は、Shakespeare の *King Lear* (1608) と *Dombey*

and Son とを比較研究し、特に、Dickens が「父親の娘を拒絶する動機」⁽¹²⁾ に集中したとして、この小説の独自性を指摘している。

前号でも論じたが、⁽¹³⁾ この小説を語るのにどうしても欠かせないのは、Malcolm Andrews が指摘しているように、息子 Paul に典型的に現われたあの奇妙な合いの子 “the grown-up child” の姿であろう。⁽¹⁴⁾ 彼は実利主義的な “the new-fashioned man” としての父親と “the old-fashioned child” としての息子とを対比させ、19世紀前半のイギリス中流階級の抱え込んだ大人世界の危機を、子供独自の視点と突き合わせることによって形而上学的に論じている。尤も息子 Paul はこの物語が開始されて三分の一少し経た19章で早々と姿を消してしまう。

この小説では、撞着語法的な言い回しの “the grown-up child” の一人である子ども Paul の視点とその世界を、19世紀前半のイギリスの社会状況とを重ね合わせることにより論じ、また父と娘の親子関係を父親の性格分析と併せて考察し、更に鉄道とこのイメージに象徴される時間的なものと不滅なもの、死と生・愛といったものと関連づけて論じてゆくことにする。この小説には、Dombey と息子、Dombey と娘の関係を中心に、これに付随する歪んだ親子関係が提示されるが、それについても併せて論じる。

II

Dickens の小説の第1章は物語の展開やテーマを暗示させ、優れた書き出しが多い。この *Dombey and Son* の第1章には、いかにも Dickens らしい才能と特色が本格的に見い出される。特に Dombey の妻の死に至る場面は、「その簡潔さ、正確さ、それにトーンと感触の精妙な確かさ」⁽¹⁵⁾ とを伴った、Dickens のみが成し得る何かを持っている。

この死に先立つ不幸な Paul の誕生の場面に戻る。ロンドンの大商人 Dombey の息子として生れてきた Paul は、男子であるからという理由で、既にその運命が定められている。この家に生まれついた息子にとっての未来は、父親からこの商社を受け継ぐものであり、Dombey 家では代々そういうことになっている。息子 Paul にとっての時間は、父親の懐中時計の音の刻みから始まり、その早すぎる死に至るまで、父親に管理されている。しかし、時の進行に連れ、この子供は、父親の期待に反して、虚弱で、年寄りめいており、時には “a young goblin” のようにも見える。父と息子との “money” をめぐっての、禅問答のようなやり取りには、人生経験を積んだ老人のようなセリフが息子から発されている。Paul は、幼児というより、“a grown man” に見え、“a strange, old-fashioned, thoughtful way” (7章) をもち、極めて早熟の様子をしている。

彼は、*A Christmas Carol* (1843) の中の、変幻するクリスマスの過去の霊の如く、時

には幼児に見えたり、時には老人に見えたりして、老人と幼児とが一人の人間の中に同居しているかに見える。その Paul が父親に、金とは何か、と問う。父はお金は何でもできる、と答える。息子は更に、ではお金は何故母を救えなかったか、また、自分が虚弱なのを何故直せないのかと問い続け、父は答えに窮してしまう。Paul が5才の頃のことである。その問答の一部を引用する。

‘Papa! what’s money?’

The abrupt question had such immediate reference to the subject of Mr. Dombey’s thoughts, that Mr. Dombey was quite disconcerted.

‘What is money, Paul?’ he answered. ‘Money?’

‘Yes,’ said the child, laying his hands upon the elbows of his little chair, and turning the old face up towards Mr. Dombey’s; ‘What is money?’ Mr. Dombey was in a difficulty. He would have liked to give him some explanation involving the terms circulating-medium, currency, depreciation of currency, paper, bullion, rates of exchange, value of precious metals in the market, and so forth; but looking down at the little chair, and seeing what a long way down it was, he answered: ‘Gold, and silver, and copper. Guineas, shillings, half-pence. You know what they are?’

‘Oh yes, I know what they are,’ said Paul. ‘I don’t mean that, Papa. I mean what’s money after all?’

Heaven and Earth, how old his face was as he turned it up again towards his father’s!

‘What is money after all!’ said Mr. Dombey, backing his chair a little, that he might better gaze in sheer amazement at the presumptuous atom that propounded such an inquiry.

‘I mean, Papa, what can it do?’ returned Paul, folding his arms (they were hardly long enough to fold), and looking at the fire, and up at him, and at the fire, and up at him again.

Mr. Dombey drew his chair back to its former place, and patted him on the head. ‘You’ll know better by-and-by, my man,’ he said. ‘Money, Paul, can do anything.’ He took his hold of the little hand, and beat it softly against one of his own, as he said so. (8)

期待した息子は妙に子供らしくなく、時には老獺に思われ、父に取っては言わば「取り替え子」(Changeling)のような存在となる。事実、Gerhard Josephによると、「中流階級のヴィクトリアンは自分たちの周りの至る所に changelings を見ていた」⁽¹⁶⁾ということである。Dickens は「妖精や妖精物語の世界を現実的な小説の中に取り込んだ、傑出した19世紀の小説家の例である」⁽¹⁷⁾ことは確かなようである。しかし、この作品の changeling の仕掛人は乳母など、子供に接触し影響力を持ちうる人物たちである。Dombey は、妻の死後、息子のために乳母を探さなければならず、不本意ながら、下層階級の中から、Polly Toodles という女性を選び出す。しかし、彼のような階級と金を持っている人間は、息子をそういった階級の者によって変質させられてはならないと固い信念を持っている。彼は乳母を非人格化し、より威厳のある名前をつけることで、彼女の階級を抹殺し、危険な女性としての存在を剝奪するために、彼女の名前を Richards と男の名前に変えさせてしまう。⁽¹⁸⁾

Paul はいわゆる普通の子供らしい側面も勿論見せる。特に姉 Florence と一緒にいるときはそれが顕著に表われる。子供ならではの視点や感覚といったものは、*David Copperfield* において本格的に展開されるが、*Dombey and Son* においても Paul を通して提示されている。彼が、Doctor Blimber's school へ入学すべく父親に連れていかれ、Doctor に面会した時の彼の心の動き、怯えといったものが伝わってくる箇所があるので紹介しよう。

The child sat on the table looking at him, with a curious expression of suppressed emotion in his face, and beating one hand proudly on his knee as if he had the rising tears beneath it, and crushed them. But his other hand strayed a little way the while, a little farther — farther from him yet — until it lighted on the neck of Florence. ‘This is why,’ it seemed to say, and then the steady look was broken up and gone; the working lip was loosened; and the tears came streaming forth. (11)

Paul の教育によかれと思って、入学させた Doctor Blimber's school での教育は、立派な紳士に仕立てようとした父親の思惑とは裏腹に、彼の態度はますます年寄りめいて、思慮深くなる。ここでの生活は彼を更に弱らせ、彼は学校を去らざるをえなくなる。Doctor Blimber の教育方法は自由闊達で自然なものを抑圧する「変化の敵」⁽¹⁹⁾といった性質のものである。時間の観点からすれば、「Dombey が Paul の未来のことばかりに取りつかれていることは、Paul の現在、彼の直接的な現実性などへのすべての関心を抹殺するものである」⁽²⁰⁾ということになる。息苦しさを与える閉塞的な学校で、Paul が見つけたものは、他の者には敵意を示したのに唯一彼にだけはなついた犬の Diogenes と、Mr. Toots とい

う実直ではあるが滑稽な青年とである。

Paul は16章で波の音を聞くようになり、海へと続く川の流が加速するのを体感し、遂には死の寓意である海へと運び去られる。こうなる運命は、5章で既に Paul の洗礼の時の描写が謂わば葬式のような冷え冷えとした暗い雰囲気の中で行なわれていることから察することができる。

It happened to be an iron-grey autumnal day, with a shrewd east wind blowing —a day in keeping with the proceedings. Mr. Dombey represented in himself the wind, the shade, and the autumn of the christening. He stood in his library to receive the company, as hard and cold as the weather ; and when he looked out through the glass room, at the trees in the little garden, their brown and yellow leaves came fluttering down, as if he blighted them.

Ugh! They were black, cold rooms ; and seemed to be in mourning, like the inmates of the house. The books precisely matched as to size, and drawn up in line, like soldiers, looked in their cold, hard, slippery uniforms, as if they had but one idea among them, and that was a freezer. The bookcase, glazed and locked, repudiated all familiarities. Mr. Pitt, in bronze on the top, with no trace of his celestial origin about him, guarded the unattainable treasure like an enchanted Moor. A dusty urn at each high corner, dug up from an ancient tomb, preached desolation and decay, as from two pulpits ; and the chimney-glass, reflecting Mr. Dombey and his portrait at one blow, seemed fraught with melancholy meditations. (5)

The Old Curiosity Shop (1841) は Nell の死をもって終了したのに対し、*Dombey and Son* の場合、Paul の死をもって終結しない。Paul は死の床で、Walter を呼んで、父に向かって “Remember Walter. I was fond of Walter!” と囁く。彼は Walter にこの家の未来を託しているかのようである。彼を連れ去った海はただ単に死の寓意としてばかりでなく、不滅性の象徴でもある。実利主義的な “the new-fashioned man” としての Dombey は、彼の信条といったものに取りつかれていたが為に、却って一番大事な息子を失うことになったのである。

さて Paul の早熟とはいかなる意味なのであろうか。Malcolm Andrews によれば、「Paul は普通の言葉の意味での早熟の反対である。彼の早熟さとは世俗的ではなく、精神的想像的なものである。」⁽²¹⁾ 子供は大人の父という Wordsworth の見方は Paul にも当てはまる。

子供は大人よりも「より大きな精神的権威、そして一種の言葉には発せられない道徳的優越性」⁽²²⁾といったものを付与されているということが、Paul を通して理解できる。

Paul は、現実世界と幻想世界との間を揺れ動いているようにも思われる。Paul の死の床を含む16章で、陽の光が何度か“golden water”に喩えられているが、これは何を意味するのであろうか。Andrews は「彼の寝室の壁の上で踊っている黄金の水としての陽光の繰り返し表われるイメージは、これら二つの非常に異なる世界の象徴的な融合として働いている」⁽²³⁾と解釈している。Dombey や Doctor Blimber などは、他の子供とは一風変わっている Paul のような子供は理解することは出来ない。作者は何故現実的な世俗世界に萎縮し疲弊した人間と人生を生き始めたばかりの人間とが同居する人物を造り出したのであろうか。ただ単にグロテスクな子供を描くことだけが作者の目的でないことだけは確かである。この小説は、Dickens のこれまでのどの作品よりも、「中流階級の大人の新しい、再構築された世界と危機に瀕した文化として考えられる子供の世界との間にある、初期ヴィクトリア朝イギリスにある分裂」⁽²⁴⁾に注意が向けられている。

Dickens は、この小説において、子供でありながら老成した“old-fashioned child”である息子 Paul を通じて、つまり一時的にはあるが子どもの世界特有の「明瞭な声とパースペクティブ」⁽²⁵⁾を通じて“materialistic”な中流階級の“ethos”をもつ“new-fashioned man”としての父親 Dombey の世界を濾過して見せた、と言えよう。Dickens は次作 *David Copperfield* に於て現実と幻想という二つの世界を彷徨し苦悩する主人公を通じて、この問題を更に徹底的に追及する。⁽²⁶⁾

III

Dickens の小説の殆どに孤児が主人公で登場しているが、*Dombey and Son* の場合はいささか異なる。Paul にしても Florence にしても Dombey という父親がいる。しかし二人の不幸は「彼等には親がいて、親の血を受け継いでいるのに、しかし孤児とは異なる理由で、彼等は限りなく彼と隔てられている」⁽²⁷⁾点にある。

Dombey は亡くなった妻と息子と娘の三人と月並みな言葉だが心が通わず、家族の中で疎外されている。Florence のみが、母親と弟と心を通いあわせることが出来るが、父はその中に入り込もうとせず、冷淡に眺めている。实例を2つ紹介しよう。最初の場面は3章からのもので、Dombey が妻の死後しばらく経ってから、妻の臨終の場面で妻と娘が抱きあっている様子を見ているとき、自分が全く閉めだされてしまったことを回想している場面である。次は第8章からのもので、娘が、体の弱い弟を、抱き抱えて階段を上ってゆくのを、背後でじっと見つめている孤独な父親の姿が描かれている場面である。

The last time he had seen his slighted child, there had been that in the sad embrace between her and her dying mother, which was at once a revelation and a reproach to him. Let him be absorbed as he would in the Son on whom he built such high hopes, he could not forget that closing scene. He could not forget that he had had no part in it. That, at the bottom of its clear depths of tenderness and truth, lay those two figures clasped in each other's arms, while he stood on the bank above them, looking down a mere spectator —not a sharer with them— quite shut out. (3)

The child immediately started up with sudden readiness and animation and raised towards his father bidding him good night, a countenance so much brighter, so much younger, and so much more child-like altogether, that Mr. Dombey, while he felt greatly reassured by the change, was quite amazed at it. After they had left the room together, he thought he heard a soft voice singing; and remembering that Paul had said his sister sung to him, he had the curiosity to open the door and listen, and look after them. She was toiling up the great, wide, vacant staircase, with him in her arms his head was lying on her shoulder, one of his arms thrown negligently round her neck. So they went, toiling up; she singing all the way, and Paul sometimes crooning out a feeble accompaniment. Mr. Dombey looked after them until they reached the top of the staircase —not without halting to rest by the way— and passed out of his sight; and then he still stood gazing upwards, until the full rays of the moon, glimmering in a melancholy manner through the dim skylight, sent him back to his own room. (8)

Dombey は、息子に対して愛情がないのではなく、それどころか、Dombey and Son 商會を継ぐ男子としての息子に強い利己的な愛情を持っている。Paul は謂わば「全くの愛情の欠如によってというよりもむしろ、間違った、利己的なすべてを奪い尽くすほどの愛情によって容赦のないほどに破壊されてしまう。」⁽²⁸⁾

娘の Florence はそんな父親でも、妻の死後も、Paul の死後も、その変わらぬ愛情をもって、拒まれても拒まれても、かたくなな父の心の中に入り込もうと努力する。一方父親は女の子供など眼中になく、それどころか娘に対して次第に不安を覚えるようになる。それでも娘はけなげにも、父と Paul の死の悲しみを分かち合おうと試みる。Dickens の前作 *Martin Chuzzlewit* (1844) が利己主義の研究であるとすれば、*Dombey and Son* は“pride”

又は“arrogance”の研究であることは疑い得ない。Dombey の性格を論ずる場合、それが作者自身の自己批判なり自己分析から生じていることは、Steven Marcus⁽²⁹⁾ や Robert Newsom⁽³⁰⁾ その他の指摘からも、容易に理解できる。

Dickens が登場人物の名前に自分の initials を秘かに取り込むことはよく知られている。例えば David Copperfield の DC、*Little Dorrit* (1857) の Clennam の C、Dorrit の D、*A Tale of Two Cities* (1859) の Charles Darnay の CD、*Dombey and Son* では、作者 Charles Dickens の initials が二人の人物 Carker と Dombey に分けて用いられている。又、Dombey という名前は部分部分をまとめて統一するの意味の embody の anagram である。⁽³¹⁾ Robert Newsom に依れば、これは単なる言葉遊びではなく、断片化と統一という観点から考えると、この小説には、作者自身の芸術的商業的に統一された全体を創り出そうとする意図と、断片化への強い恐れとが同時に表現されている⁽³²⁾ という。

Dombey 自身の pride を研究する場合に、彼の分身とも言える James Carker と彼の 2 番目の妻 Edith のそれぞれの pride と比較するとよく理解出来る。Dombey は息子を亡くした後、しばらくの間、落胆しているが、退役軍人 Bagstock の仲立ちで、Edith とその母親 Mrs. Skewton と出会い、Edith と結婚する。Edith は自分が金で買われたと思っており、二人の結婚生活は最初からうまく行かず、やがて二人は激しく衝突するようになる。ただし、そんな Edith も Florence にだけは心の内を明かし、Florence の愛情に応えようとする。しかし夫から服従を強要されると、彼女は持ち前の男のような高慢さで反発する。Dombey は娘だけが妻の信頼と愛情を得ていると思うと、強い嫉妬を覚える。そして彼は、最初の妻の場合も、息子の場合も同じことであったことを思い出し、娘に対して憎しみすら抱くようになる。

その属す階級や身分が異なろうとも、娘を金で売るという母親はほかにもいるもので、Florence が 6 章で迷子になったとき、彼女を自分の棲みかへ連れていき、衣服を奪い取った Mr. Brown も、娘 Alice をある男に金で売る。その男とは James Carker で、実は Alice と Edith とが妙な因縁で、この男と重要な関わりをもつことになる。そればかりでなく、後になって二人は実は従姉妹同志であったことまで判明する。40 章で身なりのよい Edith 親娘と貧しい身なりの Alice 親娘とが偶然出会い、Edith と Alice は一瞬立ち止って、相手を観察する。Edith は、Alice に外見ばかりでなく、心の内に抱え込んだ苦悩の痕跡までも、自分と酷似していることに気付き、寒気すら覚える。

And yet, however far removed she was in dress, in dignity, in beauty, Edith could not but compare the younger woman with herself, still. It may have been that she saw upon her face some traces which she knew were lingering in her

own soul, if not yet written on that index ; but, as the woman came on, returning her gaze, fixing, her shining eyes upon her, undoubtedly presenting something of her own air and stature, and appearing to reciprocate her own thoughts, she felt a chill creep over her, as if the day were darkening, and the wind were colder.
(40)

Dombey 夫妻の話に戻るが、二人の対立は次第にエスカレートし、Carker の知るところとなる。Dombey は彼に妻の不服従のことで相談までしている。Carker はこういった夫婦の不和につけこんで、Dombey の良き相談者である振りを装い、巧みに Edith に取り入り、拳句は彼女に駆け落ちをもちかける。ここまでは彼の思惑通りことは運ぶが、実は、彼は逆に彼女に利用されていただけで、フランスで彼女からにべもなく拒絶される。そのうえすぐ背後には、彼等の背信行為に激怒した追手の Dombey が迫っている。

話は前後するが、Dombey は何度かの衝突の後、妻の方から別れ話を持ち出され、ついにはその結婚生活は破局を迎える。彼はプライドをひどく傷つけられ、使用人との駆け落ちという不名誉のおまけまでつき、また、不運は重なるもので、事業の方も失敗してしまう。彼が守ろうとするばかりに、却ってその存続に一番必要な息子の命を犠牲にしてしまうほどまで執着した Dombey and Son 商会は破産する。

47章で、Dombey は、妻の駆け落ち後、娘の Florence を抱き寄せるどころか、逆上し殴ってしまう。その後彼は、娘も使用人も立ち去った荒涼とした屋敷の中で、自ら招いた結末とはいへ、絶望と孤独のうちに、自殺を思うとき、Walter と結婚し海外に行っていたが帰国し、父親の様子を見に戻ってきた Florence に救われる。59章で父と娘の再会の場面で使用されている表現 “Let him remember it in that room, years to come!” は、既に18章で、Paul を失った悲しみを分かち合うために娘が父のもとへ来た場面で、何度も繰り返し使われている。作者は Dombey にもっと早く娘の愛に目覚めよという訳である。作者は omniscient な存在で全ての成り行きを知っているのは当然なのであるが、18章で既に、警告し予告しているのである。そして Dickens お得意の読者の涙を誘うセンチメンタルな場面となる。Dombey の鏡に映る姿が、非人称の “it” で表現され、彼が自己喪失のどん底に陥っている。その最中に、娘 Florence が登場する劇的な場面の一部を引用しよう。

It sat down, with its eyes upon the empty fireplace, and as it lost itself in thought there shone into the room a gleam of light ; a ray of sun. It was quite unmindful, and sat thinking. Suddenly it rose, with a terrible face, and that guilty hand grasping what was in its breast. Then it was arrested by a cry — a

wild, loud, piercing, loving, rapturous cry— and he only saw his own reflection in the glass, and at his knees, his daughter!

Yes His daughter! Look at her! Look here! Down upon the ground, clinging to him, calling to him, folding hands, praying to him.

‘Papa! Dearest papa! Pardon me, forgive me! I have come back to ask forgiveness on my knees. I never can be happy more, without it!’

Unchanged still Of all the world, unchanged. Raising the same face to him as on that miserable night. Asking *his* forgiveness!

‘Dear papa, oh don’t look strangely on me! I never meant to leave you. I never thought of it, before or afterwards. I was frightened when I went away, could not think. Papa, dear, I am changed. I am penitent. know my fault. I know my duty better now. Papa, don’t cast me off, or I shall die!’

He tottered to his chair. He felt her draw his arms about her neck ; he felt her put her own round his ; he felt her kisses on his face ; he felt her wet cheek laid against his own ; he felt —oh, how deeply!— all that he had done.

Upon the breast that he had bruised, against the heart that he had almost broken, she laid his face, now covered with his hands, and said, sobbing :

‘Papa, love, I am a mother. I have a child who will soon call Walter by the name by which I call you. When it was born, and when I knew how much I loved it, I knew what I had done in leaving you. Forgive me, dear Papa oh say God bless me, and my little child!’ (59)

この後で、Florence は更に自分たちには海で生れた (航海中) Paul という名の男の子がいることを告げる。まさに以前の Paul の生まれ変わりという訳である。この場面では *Little Dorrit* (1857) における父親 William とその娘 Amy の関係と同じように、父と娘の立場が逆転しており、娘が母親のような役を演じている。Dickens は他の作品でも父娘(祖父と孫)の立場の逆転させている。彼女たちは母親代りであったり、主婦代りであったりする。例えば、*The Old Curiosity Shop* の Little Nell、*Nicholas Nickleby* (1839) の Madeline Bray、*Martin Chuzzlewit* (1844) の Mary Graham、*Agnes Wickfield Bleak House* (1853) の Esther Summerson と Charley Neckett、*Our Mutual Friend* (1865) の Jenny Wren などである。

Dombey and Son には、家庭人として、特に父親として自分が相応しい人間かどうか、ということに対する作者自身の思いが投影されているのではなかろうか。というのは、

Dickens の娘 Katey が G. B. Shaw に宛てた手紙の中にある”Why was I ever a father!”という言葉⁽³³⁾ から推察できる。

Dombey と Florence の関係の推移を、Julian Moynahan は「ヴィクトリア朝の、硬直した専制的な仕事に係わる男の父権制が涙する母や娘たちの母権制に屈服」⁽³⁴⁾したのであると述べている。又、更に「*Dombey and Son* の終りで、Dickens は物事は、Dombey の階級と機能を持つ男たちが、彼等の娘を母親とし、屈服すれば、すべてうまく行くであろうと言っている」⁽³⁵⁾ のであるとする彼の指摘は、Dombey や、現代まで連綿と続く materialistic な世界の中にどっぷり浸った彼と同類の人々の愚行を見ると、成程と思わざるを得ない。Dombey が19世紀社会を体現し、Florence が心と魂を表わすとすれば、こういった二人の再結合が再生の象徴となる。⁽³⁶⁾ Adrian は、家庭や親子関係と社会や国との関係を「家庭的状況を『国家的状態の小宇宙』としたことによって、Dickens は、貪欲、狭量なプライド、無情な競争によって支配される社会は、献身的な愛によってのみ再生されうるのであるということを意味している」⁽³⁷⁾ と解釈する。更に、彼は「かようにして *Dombey and Son* はその時代の寓話として機能する」⁽³⁸⁾ と述べ、この小説の家庭と国・社会との関係を指摘している。

Welsh は、Shakespeare の *King Lear* と *Dombey and Son* との類似を詳しく論じており「Dickens は、悲劇が我々を我々自身から連れ出し、それと同時に我々自身の認識を強要する手段であるが故に、彼を最も深く動かしした Shakespeare の悲劇にこの小説のモデルを取った」⁽³⁹⁾ としている。しかし、2作品の違いは、「劇における父と娘に与えられた相対的重みの転倒」⁽⁴⁰⁾ にある。*Lear* では、Cordelia のセリフはわずか100行を越えるかどうかという量しかない。19世紀の Shakespeare 解釈の中で Cordelia の存在がにわかになくなっていった⁽⁴¹⁾ ことも、Dickens の Florence 重視につながったのであろう。

Moynahan によれば、「Dombey の自己愛のプライドは Edith Granger の自分を傷つけて行くプライド、Carker の秘かな偏執病的なプライドと張り合っている」⁽⁴²⁾ という。さて猫のように陰険な物腰の、この「秘かな偏執病的なプライド」の持ち主、James Carker については、55章に描かれているように、彼の逃避行と鉄道との関係抜きには語れない。Steven Marcus が「Dickens の時間意識の個人的で相対的な性質をもって使用した最も印象的な例は、Carker のフランスからイングランドへの必死の旅の説明の中に見出される」⁽⁴³⁾ と語っているように、Dickens は、時間を視覚に転換しながら、旅の比喻によって表現している。

Carker は、*Oliver Twist* (1839) の殺人犯 Bill Sikes が幻覚に悩まされていたように、追跡者の馬車の鈴と車輪と蹄の音の幻聴に怯えながら、恥辱と絶望と不安と憎しみと悔恨とが錯綜として目眩く気持ちに囚われながら、物凄い速さで遁走し、疲れ果て、しかし休

息しようにも眠ることも出来ず、遂には追い詰められ、列車に轢かれて、バラバラになって死ぬ。Carker の死を目前にした心理状態が、目まぐるしく変わる景色と感情の推移を通して効果的に現出されている。

彼は、三昼夜に及ぶ逃走の最初の晩に、追跡されていることとは別の、形容されざる幻想的恐怖、即ち死の予感に不意に襲われ、死ぬまで取りつかれている。死の予感と死そのものとの間の旅に喩えられた逃走の中に、彼の過去と現在と未来とが、又この旅と彼の人生そのものが混在し、実在感を喪失した幻影として現出する。彼にとって、時間は単調に列車のイメージを伴って、破滅に向かって一直線に流れていく。町、村、教会、丘、橋、川、波止場、埋葬所、朝、昼、夜、馬、盲人、白痴、乞食その他種々雑多な事物や生き物が、彼の人生行路のそれと重なり合い、現われては消えていく。

Dickens は、目まぐるしく変わる事物や人間の心理や行動を矛盾を来す程の、細部に渡る彼独特の観察力で描出する。例えば、“blind men with quivering eyelids” (55) などはその最たる例で、こういった現実的描写が幻影として表現されているところに、不思議な効果が生れる。又約3ページにも渡って、anaphora 風に、前置詞 of で始まる文章が連続して使用されているがために、非常に切迫した様子と Carker の記憶の断片が回り灯籠の如く現出しては消滅していく様子とが鮮やかに伝わってくる。本来ならば、関係する部分をすべて引用したいのであるが、余りに長くなるので、敢えてほんの一部のみを切り取って紹介しよう。

It was a fevered vision of things past and present all confounded together; of his life and journey blended into one. Of being madly hurried somewhere, whither he must go. Of old scenes starting up among th novelties through which he travelled. Of musing and brooding over what was past and distant, and seeming to take no notice of the actual objects he encountered, but with a wearisome exhausting consciousness of being bewildered by them, and having their images all crowded in his hot brain after they were gone.

A vision of change upon change, and still the same monotony of bell and wheels, and horses' feet, and no rest. Of town and country, postyards, horses, drivers, hill and valley, light and darkness, road and pavement, height and hollow, wet weather and dry, and still the same monotony of bells and wheels, and horses' feet, and no rest. A vision of tending on at last, towards the distant capital, by busier roads, and sweeping round, by old cathedrals, and dashing through small towns and villages, less thinly scattered on the road than former-

ly, and sitting shrouded in his corner, with his cloak up to his face, as people passing by looked at him. (55)

意識と言語・文体との関係は、Marcus によれば、「Carker の意識は、その即時性のなかにあり、その散文のもつまさにシntaxとリズムがその一部となる」⁽⁴⁴⁾ ということになる。

追っ手の Dombey は Carker の dismemberment に至る悲惨な最後を目の当たりにするが、これは彼にとって他人事ではない。ここでは鉄道は、文明の進歩といった肯定的な意味合いをもったものではなく、単調に機械的に無意味に一直線に破滅や死へと向かって突き進むイメージをもっている。謂わば鉄道は時間や急進的变化の象徴であり、これは Dombey の持っているやはり単調に時を刻むのみの時計のもつ意味合いと結び付く。一方、同様に、Florence の絶え間なく流れる涙と海の流れとの間にも結び付きが見られる。⁽⁴⁵⁾ 既に見てきたように、不滅の愛の象徴でもある海は同時に死の象徴ともなり、一方破壊的なイメージをもった鉄道も、進歩や創造性といった要素をもちあわせており、「両者は創造的であると同時に殺人的でもある」⁽⁴⁶⁾ という二面性をもつ。こういった二面性をもつ鉄道と海の象徴は、互いに排除しあう男女の対立・相克を取り込むことによって、より一層重要な意味を帯びてくる。Auerbach は、鉄道と海の乖離と男女や人間同志の隔たりと関連付けて、「鉄道と海の間での分離は、形而上学的に、Dombey 氏と Florence の間での分離を小説の分裂した世界の中心で拡大している」⁽⁴⁷⁾ と述べている。

Dombey に代表される功利主義的な男の世界は、Florence に代表される超越的な不変の愛とか生命の象徴たる海や水の世界に呑み込まれる形で、即ち、Dombey の pride が Florence の愛に屈服して、対立したままでなく和解した形で終了する。Dombey に安らぎと平和が訪れる。結局、Kathleen Tillotson が主張している様に「この本の真の主題は Dombey and Son ではなく Dombey and Daughter である」⁽⁴⁸⁾ ということになる。Dombey は娘の愛で立ち直り、Scrooge と同じく、ついに改心する。しかし、これに対しては、彼は「父親の中でも最良の父親となり、素晴らしい小説を台無しにしてしまっている」⁽⁴⁹⁾ という Taine のような批判も当然生じてこよう。Tillotson は *King Lear* を引き合いに出してこの批判への弁護をしている。⁽⁵⁰⁾ Gerhard Joseph は“changeling”を中心に据える立場から、やはりこの小説の中心は Dombey and Daughter であることを確証し、⁽⁵¹⁾ 更に「Dombey に生れた息子、即ち Dombey が要求した父親の望みを鏡のように忠実に映し出す機能を果たす人間になることを避けた“old, old”なる子供は、かくて、妖精たちによって提供されたものでも、乳母によって提供されたものでもなく、むしろ父親の気違いじみた極端な欲望自体によって、父親に提供されたものである」⁽⁵²⁾ と展開している。結局、息子 Paul は父

親の過度の期待と欲望の犠牲者になったのである。

しかし、この小説のタイトル *Dombey and Son* の Son の重要性はやはり無視出来ない、と敢えて主張したい。Paul は、死後も、海の象徴するものによって、Florence に密接に関わり、又、死の直前、父親に Walter のことを忘れないでほしいと遺言のごとく言っており（実際 Florence と Walter の結婚によって、三番目の Paul が生れる。）、その魂が生き続けているかに見える。又、これは非常に些細なことであるが、Florence のところに Toots によって Doctor Blimber のところから連れてこられた犬の Diogenes は、Paul の忘れ形見でもあり、彼女が窮地に立たされたときに彼女の慰めとなる。Paul は、父にとっては、彼が存在しなくなった後にむしろ、逆説的にはあるが、その存在が大きくなったといえる。

結局、作者が、この小説で提示したものは、ヴィクトリア朝初期の物質主義的・功利主義的・進歩的な大人の世界に、Paul によって代表される子供の視点を通過させることで、子供のもつ道徳的優位性や子供時代そのものを回帰させることと、Florence によって代表される愛の力によって、硬直した親子関係を打破し、新たな親子関係を再び樹立させることであつたと言えよう。

注

使用テキストは、*Dombey and Son in The Oxford Illustrated Dickens* (OxfordUP, 1950) による。尚、本文中の本作品からの引用文の末尾に付された括弧内のアラビア数字は章数を表わす。

- (1) F. R. and Q. D. Leavis, *Dickens the Novelist* (London: Chatto & Windus, 1970), 1.
- (2) See Julian Moynahan, "Dealings with the Firm of Dombey and Son: Firmness versus Wetness," *Dickens and the Twentieth Century* Ed. John Gross and Gabriel Pearson (London: Routledge and Kegan Paul, 1966), 121-31.
- (3) J. H. Miller, *Charles Dickens and the World of His Novels* (Harvard UP, 1958), 143-150.
- (4) See Steven Marcus, "The Changing World: *Dickens: from Pickwick to Dombey* (London: Chatto & Windus, 1965), 293-357.
- (5) See Alexander Welsh, *From Copyright to Copperfield: The Identity of Dickens* (Cambridge: Harvard UP, 1987), 81.
- (6) Marcus, 57.
- (7) See Gerhard Joseph, "Change and the Changeling in *Dombey and Son*," *Dickens Studies Annual* 18 (Southern Illinois UP, 1989), 179.
- (8) See Nina Auerbach, "Dickens and Dombey: A Daughter After All," *DSA* 5 (1976), 185.
- (9) Miller, 14
- (10) Arthur A. Adrian, *Dickens and the Parent-Child Relationship* (Ohio UP, 1984), 147.
- (11) Adrian, 30-63.
- (12) Welsh, 89.
- (13) この点については、拙論「ディケンズにおける子どものイメージ」(群馬大学社会情報学部研究論集第3号、1997)を参照されたい。
- (14) See Malcolm Andrews, *Dickens and the Grown-up Child* (Macmillan, 1994), 112-134.

- (15) Leavis, 2.
- (16) Joseph, 187.
- (17) Joseph, 187.
- (18) See Joseph, 189.
- (19) Marcus, 317.
- (20) Marcus, 320.
- (21) Andrews, 130.
- (22) Andrews, 131.
- (23) Andrews, 133.
- (24) Andrews, 134.
- (25) Andrews, 134.
- (26) この点については、拙論「ディケンズにおける子どものイメージ」(群馬大学社会情報学部研究論集第3号、1997)を参照されたい。
- (27) Miller, 148.
- (28) Miller, 148.
- (29) See Marcus, 346-357.
- (30) See Robert Newsom, "Embodying *Dombey*: Whole and in part," *DSA*, 18, 213.
- (31) See Newsom, 199 Steven Marcus が、コロンビア大学の卒業記念セミナーで、この anagram について言及したということである。
- (32) Newsom, 215.
- (33) See Adrian, 63.
- (34) Moynahan, 130.
- (35) Moynahan, 131.
- (36) Adrian, 107.
- (37) Adrian, 107.
- (38) Adrian, 107.
- (39) Welsh, 102.
- (40) Welsh, 95.
- (41) See Welsh, 95.
- (42) Moynahan, 123.
- (43) Marcus, 333.
- (44) Marcus, 334.
- (45) See Auerbach, 103.
- (46) Auerbach, 104.
- (47) Auerbach, 105.
- (48) Adrian, 105. ここでは Adrian の Tillotson の引用を借用している。
- (49) Welsh, 87. ここでは Welsh の Taine の引用を借用している。
- (50) See Welsh, 87.
- (51) Joseph, 192.
- (52) Joseph, 192-3.